

東北公益文科大学

総合研究論集

第28号

研究ノート

中国現代詩の翻訳と世界文学

——是永駿の仕事を中心に(その二・芒克の詩)——

呉 衛 峰

二〇一五年七月二十一日発行

中国現代詩の翻訳と世界文学

——是永駿の仕事を中心に（その二・芒克の詩）——

呉ご
衛峰えいほう

一

是永駿の訳による中国現代詩人の芒克（マンク）について分析する前に、前回「中国現代詩の翻訳と世界文学（その一）」に引用した、アメリカの中国文学者であるステイブ・オーウエンが北島（ペイタオ）のマックドゥーガルによる英訳に対する書評¹をもう少し引用して、中国現代のモダニズムの詩歌の翻訳における問題点について考えたい。

まず、北島の詩の中で成功した作品については、それは言葉によるといふより、言葉で作られたイメージによるといふ指摘の後、以下の意見を述べている（最初の一行の引用は前回と重複していることを断っておく）。

This is a possible solution to what a world poetry might be, a way of writing poetry that is essentially translatable. (Hegel believed that all poetry could be translated without loss, because its true medium was not words but "poetic ideas.")²

(1) 中国現代詩の翻訳と世界文学——是永駿の仕事を中心に（その二・芒克の詩）——

〔北島の詩の成功は「世界詩歌がどうあるべきかに対する一つの解決策になるかもしれない。つまり、本質的に翻訳可能な詩を書くことである。(ヘーゲルは詩の本当の媒介は言葉ではなく「詩想」であるとして、すべての詩は失うものなく翻訳可能だと信じていた。)]

(2)

オーウェンは同じ書評の中でまた、北島の詩における美しいイメージについて、次のように述べている。

The image in itself would probably have beauty in almost any language. McDougall, however, has translated this world poetry of fungible images into true English poetry, which does indeed rely heavily on word patterns, on a particular vocabulary, and on musical effects (not to mention several loud echoes of Anglo-American poetry).³

(このイメージ自体はおそらくどの言語においても美しいものである。マックドゥーガルは何とかこの置換可能なイメージに満ちた世界詩歌を本物の英語の詩に翻訳した。そしてこの翻訳の成功は「原作と異なって」明らかに言葉のパターンや特殊な語彙、及び音楽的効果(英米詩歌の幾つかの顕著な影響は言うまでもなく)に多く負っているのである)。

オーウェンはここで、北島の詩を全体的には評価していないが、「成功した」と認める一部の詩については、それは詩の魂ともいえるべき「言葉」の使い方によるのではなく、言葉で作られたイメージによると指摘したのである。それゆえ、北島の詩は著しく翻訳し易いものとなっているので、英訳は訳者の技量で、詩の本来あるべき姿、つまり「言葉の芸術」と仕上げたという見方を取った。

オーウエンの指摘した「世界詩歌」の直面したジレンマは、面白いことに、「世界文学」という概念の再提出者であるダムロツシユでは、世界文学のあるべき姿と捉えられている。また前回（その一）における引用を繰り返す。

あらゆる作品はひとたび翻訳されると、発祥文化の専有物ではなくなる。あらゆる作品が原語で「始まった」だけになるのだ。外国の読者にとって一番重要なのは、その詩が新しい言語でどれほどうまく機能するかということだ。

明らかに両名は異なる視点から世界文学を構成する翻訳文学を解釈している。中国古典文学研究の専門家であるオーウエンから見ると、アメリカにおける英語中心の世界文学に翻訳を通じて組み込まれた一部の中国現代詩は、自国文化に根ざした自国言語の歴史と豊富な引喩を離れて、外国の読者を意識する翻訳可能な文体で創作されていることが存在する一方、その翻訳可能性のゆえに、優れた訳者がそれを目的言語に根ざした本物の芸術作品に仕上げたことにより、目的言語の読者は翻訳を通じて読むかぎり、その詩人を翻訳の優劣によって判断することになる。

ダムロツシユの意見によると、たとえ出発言語による傑作の場合であっても、越境して世界文学の一員となる以上、読者の目から読む価値のある文学作品として翻訳されなければならない。

二一

管見では、北島はオーウエンが指摘したほど中国語の詩的言語から離れていない。彼はむしろ、豊富な遺産を残した中国古典詩（オーウエンの専門）の言葉遣いと異なる、現代口語体詩の一文体を模索していたように見える。比較すれば、若いとき北島とともに詩雑誌『今天』を創刊した芒克（マンク）の詩の一部は、散文に近いほど平明な文体で書か

れている。

是永駿のすぐれた翻訳によって日本で知られる芒克の「死后也还会衰老」はその典型である。大岡信が訳詩集に寄せた言葉には、「一九七〇年代以後の日本現代詩に、たぶん最も欠けているもの、それが中国の現代詩の中で、苦しみに呻きつつ、光り輝いている」というくだりがあるが、それも主に芒克のこの詩についての言及である。大岡は是永駿の翻訳を通じて芒克を読んだのである。

原作の前半のみを引用する。

地里已长出死者的白发

这使我相信，人死后也还会衰老

人死后也还会有恶梦扑在身上

也还会惊醒，睁眼看

又一个白天从蛋壳里出世

并且很快便开始忙于在地上啄食

也还会听见自己的脚步

听出自己的双脚在欢笑在忧愁

8 7 6 5 4 3 2 1

也还会回忆，尽管头脑里空洞洞的

尽管那些心里的人们已经腐烂

(以下略)⁵

10 9

タイトルと最初の一連だけを逐語的に訳してみると、以下のようなろう。

「死んだ後でも老衰をつづける」

地面からすでに死者の白髪が生え出ている

それが私に信じさせる、人は死んだ後でも老衰を続けることを

……

試訳の詩的完成度や文体を別にしても、原作は内容的にはかなりインパクトのある詩行であることが分かる。それでは、本題となる是永駿の訳を見よう。

「死してなお老いさらばえることがある」

地面にはや生え出た死者の白い髪

1

(5) 中国現代詩の翻訳と世界文学——是永駿の仕事を中心に(その二・芒克の詩)——

それがわたしに信じさせる、ひとは死してなお老いさらばえることがある

2

ひとは死してなお悪夢に襲われることがある

3

そしてうつろいめざめ、まのあたりにそれを見る

4

またひとつ白昼が卵の殻を破って生まれ

5

すぐにせわしなく地上の餌をついばむ

6

自分の足音を聞くこともある

7

自分の両足が笑いさざめいている憂いに沈んでいる

8

追憶にふけることもある、頭の中はからっぽなのに

9

心の中の人々はすでに腐爛しているのに

10

(下略)⁶

二二

是永駿訳の最初の一連を見よう。「地面(じめん)にはや生え出た死者(ししや)の白(しろ)い髪—それがわたしに信(しん)じさせる、ひとは死(し)してなお老いさらばえることがある」。短い二行であるが、原作と比べれば、

三つの特徴が読み取られる。まず、声を出して読めば、訳における硬質な言葉と軟質な言葉の見事な按配が作り出した詩行の音の美しさと力強さに心を動かされる。1行目の「地面（じめん）」と「死者（ししゃ）」、2行目の「死（し）」という漢語の硬質な語感と、1行目の「はや生え出た」と「白い髪」、2行目の「人は」と「なお老いさらばえる」という和語の軟質な響きは、詩行に見事なリズム感を刻む。「死者」、「白人」、「信じさせる」、「死して」の頭韻「し/shi」の聴覚的、暗示的效果も見逃せない。

つぎに、原作1行目の「地里已长出死者的白发」という動詞文は、長い連体修飾語を嫌う中国語の特性によるものと思うが、訳では日本語のシンタクスを生かして「地面にはや生え出た」という連体修飾語で「死者の白い髪」を際立て、読者を戦慄させる。

それから、一連目において、1行目と2行目の後半における「はや生え出た」と「老いさらばえる」のような古語風語彙¹¹詩語の使用は、真ん中に挟まっている「それがわたしに信じさせる」という如何にも口語風で日常的な和語の文によって、その非日常的異化作用をこの一連に与え、訳詩に格調をもたらず。原作では1行目、2行目の前半、後半はほぼ同じ調子の言葉遣いであるので、訳は原作に見られない言葉と音声の緊張感からまるで協奏曲の急、緩、急の三楽章が二行に縮められたような印象を受ける。

原作はシンタクスにおいては基本的に曖昧さのない平明な構造である。第2連4行目後半の動詞「睁眼看到」は句跨りで、目的語は第3連の5行目・6行目に当たる。中国語の基本文型はSVOであるので、悪夢から目が覚めて、白昼を見るという意味である。

訳では、4行目の「睁眼看到」にあたる部分は「まのあたりにそれを見る」となっており、少なくとも第3連に移る前には、「それ」は悪夢を指す言葉としても読めるので、悪夢から目が覚めたら、今度悪夢が現実となってまのあたりにそれをもういちど見ざるを得ないという意味にも取られる。また、第3連の内容はいま見た悪夢と理解しても良い。

原詩の平面的な一連が日本語訳では重層的になったのである。

さらに、第4連には詩人翻訳者である是永訳の醍醐味が遺憾なく發揮されている。

原詩・

也还会听见自己的脚步

7

听出自己的双脚在欢笑在忧愁

8

是永訳・

自分の足音を聞くこともある

7

自分の両足が笑いさざめいている憂いに沈んでいる

8

下線を引いてある「也还会」の繰り返しは、原詩ではリフレインの働きをしていると思われるが、是永訳では「こともある」の反復で対応している。原詩8行目は逐語訳すると、「自分の両足が笑ったり憂ったりするのを耳にする」という意味で、二つのイメージを並列させている。しかし是永訳を見ると、「自分の両足が笑いさざめいている憂いに沈んでいる」と大胆に書き換えているのが分かる。

原詩の8行目はやや陳腐な感みがあり、詩的力の弱い部分であることは否めない。是永の改作は二つの平板なイメージを重ねることによって、一見難解な訳となっているが、味読しているうちに、笑いと憂いの二項対立を解消した、人間の生死における両者の重なりという真実に迫っていく深みのある詩句であると感銘を受ける。

一言でいえば、是永駿の見事な日本語訳は、芒克の内容的に濃厚であるが文体とシンタクス的には平板な原詩に重層性とさらなる深みを与え、原詩におけるモダニズムをいっそう引き立てる新しい作品となったのである。

おわりに

中国現代詩、もしくは現代文学の創作において、管見だけでは、フランス籍のノーベル文学賞受賞者の高行健がかつて、伝統的文学言語を離れ、できる限り熟語等を使わない文体を試みている旨の発言をしていた。ミラン・クン德拉も翻訳可能な文体で小説を書いていたと語ったことがある。欧米中心の世界文学に認められることを意識すると、およそ避けられない現状であろう。

一方、オーウェンは良き翻訳者が世界文学に組み込まれようとする発展途中国の作家たちにとって如何に重要かを力説していた。筆者から見ると、初の中国籍ノーベル文学賞受賞者の莫言はその好例である。莫言の小説は当然様々な面で評価されるべきであるが、言葉の運用力の面では現代の他の中国人の一流作家に及ばないところがある。ノーベル賞の世界的政治力学の他に、ハワード・ゴールドブラット等の優れた翻訳者に負ったところは大きい。

芒克の詩は日本において、是永駿という良き翻訳者を得て賞賛を得たと言わざるを得ない。この事実はダムロツシユの提唱する「世界文学」の東アジアにおける一好例となっている。

中国現代詩のモダニズムは1930年代から40年代にかけてある程度の発展を遂げ、革命の成功によって中国本土では一時断絶させられた。ただ、台湾では余光中、羅門などによってその命脈が受け継がれ、現在まで発展を遂げてきた。今度は台湾現代詩と日本における翻訳について考察をしたいと思う。

¹ 呉衛峰「中国現代詩の翻訳と世界文学——是永駿の仕事を中心に（その一・北島の詩）——」『東北公益文科大学総合論集』第26号、2014年8月、（10）頁。

² Stephen Owen, "What Is World Poetry?", in *The New Republic* (November 19, 1990), p.31. 日本語訳は筆者によるものである。

³ *Ibid.*, p.32. 日本語訳は筆者によるものであり、「」内の文言は筆者が文脈に従って追加した。

⁴ ダムロツシュ著、秋草俊一郎等訳『世界文学とは何か』（国書刊行会、2011年4月）、四三頁。
David Damrosch, *What Is World Literature?*, Princeton University Press, 2003.

⁵ 芒克《芒克诗选》（四群猿（1986））（中国文联出版公司、1989年2月）、119頁。

⁶ 芒克著、是永駿訳『芒克（マンク）詩選』（書肆山田、1990年10月）、二〇四〜二〇五頁。